

「サル化」する人間社会

山極寿一・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

目次

はじめに 5

第一章 なぜゴリラを研究するのか 11

人類学は何を解明するものか／進化論と西洋社会／

日本で生まれた霊長類学／今西錦司の思想／

「ジャパニーズ・メソッド」の確立／「近衛ロンド」で受けた影響／

屋久島のサルを人づけする／ゴリラの調査に乗り出す／例外の科学

第二章 ゴリラの魅力 39

ゴリラ研究のメッカ、カリソケ研究センターへ／

ダイアン・フォッシーという人／初めてヴィルンガのゴリラと出会う／

ゴリラは人間を受け入れてくれる／誰も負けず、誰も勝たないゴリラ社会／

ゴリラは相手の気持ちを汲み取っている／ゴリラには遊ぶ能力がある／

人間にもかつては共存能力があったはず／タイタスとの再会

第三章 ゴリラと同性愛 73

オスだらけの不思議な集団／ピーナツ集団に緊張が走る／
パティの股間に、驚きの発見／オスの同性愛行動／遊びと同性愛行動／
同性愛が起きる理由／オスだけの集団のその後／

第四章 家族の起源を探る 93

母系社会、父系社会／
オスの睨丸の大きさとメスの発情兆候／インセスト・タブー／
人類の「家族」は、初めはゴリラ型だった？

第五章 なぜゴリラは歌うのか 115

ニシローランドゴリラの研究が始まる／
成長が遅い理由とは／ゴリラは歌う／
食べ物分け合うという行動

第六章 言語以前のコミュニケーションと社会性の進化 133

言語が生まれた背景には、家族の成立がある／
人類の進化と食料革命／肉食を開始した後、脳が発達した／
子守唄が言葉のもとになった／言語の創生と社会脳の発達／
瞳によるコミュニケーション／脳の発達は集団規模と比例する／言葉とは何か

第七章 「サル化」する人間社会 153

人間社会はサル社会になり始めている／サルは所属する集団に愛着を持たない／
霊長類の共感力と人間特有の同情心／人間の社会性とは何か／

個人の利益と効率を優先するサルの序列社会／通信革命と序列社会／

IT革命によるコミュニケーションの変容

編集協力 濱野ちひろ

キャラクター（トレックくま）イラスト フジモトマサル

カバーイラスト 唐仁原教久

装丁・デザイン 立花久人・福永圭子（デザイントリム）

はじめに

霊長類学と人類学の研究を通して、私は人間とは何かということを探ってきました。研究対象は、人類と祖先を同じくするゴリラです。私は人間から一步離れて、人間の社会を眺めています。人間の鏡であるかのようなゴリラを通して、人間の本性を探っているのです。

私は人間の人間たるゆえんは「家族」にあると考えています。

家族というのは、私たち人間にとってあまりにも身近で当たり前の存在ですが、動物全体を見渡してみると、人間のような家族を持つ種はありません。たとえば鳥はつがいで仲良くします。オオカミは夫婦で子育てします。サルだって、一見、人間の家族に似たような群れを作っていることがあります。

しかし彼らのつながりは一時期のもので、多くの場合、繁殖行動をきっかけにしてつがいになり、子育ての期間にのみ限定的にペアになります。それに対して、人間の家族は、一生涯にわたって続きます。

人間の家族という集団は非常に特殊なもので、不思議な集団です。

家族は近代が生み出した文化の産物だと考えられている節もあるかと思いますが、そうではありません。家族の起源は、初期人類が熱帯雨林を出て、草原で暮らすようになったころにまで遡れるのです。

人類は進化の過程で、必要に迫られて家族という集団を生み出したと私は考えています。家族とは、人間の組織の中でもっとも古いものであり、今でも機能している社会形態です。人間の家族は、どういう社会から生まれたのでしょうか。どんな条件で、何のために？ 家族というものが生物学的な背景を持っているとしたら、そこには、系統的な、人間に近い、生物学的に近い動物の社会が参考になるだろうと考えられます。つまりヒト科の仲間であるゴリラ、オランウータン、チンパンジーが観察対象にあたります。遺伝子的に、ヒトとゴリラ、オランウータン、チンパンジーとの違いは二パーセントもありません。類人猿の仲間たちは、私たちと非常に近い存在なのです。

ゴリラと向き合う長年の研究を通して、私は様々なことを学びました。彼らの生活をつぶさに見ていると、初期の人類の姿が推測されます。

苛酷な自然環境にさらされながら、人類はいかにして生き延びてきたのか。言葉の生まれる以前に、どのようなコミュニケーションをとっていたのか。食物の分配はいかにして

行われ、子育てはいかにして行われていたのか。そんなことを、ゴリラは私に教えてくれます。

ゴリラには、群れの仲間の中で序列を作らないという特徴があります。喧嘩をしても、誰かが勝って誰かが負けるという状態になりません。じつと見つめ合って和解します。ゴリラの社会には勝ち負けという概念がありません。

こういった平和的な性質に触れて、ゴリラが人間よりもある意味で優れていると感じることがあります。

面白いことに、多くのサルはゴリラとは正反対で、まさに勝ち負けの世界を作り出します。サル社会は純然たる序列社会で、もともと力の強いサルを頂点にヒエラルキーを構築しています。弱いものはいつまでも弱く、強いものは常に強い。諍いさかいが起きれば、大勢が強いものに加勢して弱いものをやっつけてしまいます。

では、人間社会はどちらに近いでしょうか。現代社会はどちらの部分も備えている、と言うのが正しいでしょう。ゴリラのように勝ち負けをつけない感性は、人間の様々な部分に見受けられます。そして、サルのように序列を好むシステムもまた、現代社会には存在しています。私が見る限り、人間社会は加速的にサル社会化しているようにも感じられます。

す。

人間社会がサル社会に近づく理由を考えると、家族というキーワードは無視できません。家族とは、私の考えでは人間性の根本を担う非常に重要なものです。しかし、現代社会では家族は存在感を薄めています。個人主義の人々が増え、家族という形態が今の社会にはぴったりのなじまないかのようです。

家族が失われたならば、人間の未来はどうなるのでしょうか？

家族が解消されてしまえば、人間の築き上げてきた社会の仕組みは根本から変わっていかざるを得なくなります。そして、それはあまり明るい未来とは言えません。

タイトルとなった『「サル化」する人間社会』とは、私が憂慮する未来の姿をたとえたものです。

人間が人間らしさを保つために必要な家族をないがしろにし、個人主義が突き進んでいけば、社会は平等性を失っていくと想像できます。それは、優劣を行動原理とするサルの社会に非常に似ています。

霊長類は私たち人間に、人間らしさとは何か、人間の社会とは何かを教えてください。人間を一步抜け出して霊長類の社会を研究してきた私は、彼らからのメッセージをひもと

き、私たち人類の秘密の一端を解き明かそうと思っているのです。

第一章

なぜゴリラを研究するのか

人類学は何を解明するものか

人間は家族を重要視する生き物です。人間は自分というひとりの存在である前に、「どの家族の出身であるか」「どんなコミュニティに属しているか」を大切に社会を形づくってきました。人間は本来、家族なしには生きていけません。個人ひとりきりの存在には、決してなりきれないものです。

人間は家族というものを生涯引きずって生きていきます。家族を愛し、家族に縛られます。それが人間という生き物の持つアイデンティティであり、人間性と呼ぶべきものの根源のひとつでもあると、人類学と霊長類学の研究の末に私は思うようになりました。

では、人間性とはいったい何なのでしょいか。

私が初めてこの疑問を持ったのは高校時代でした。

一九六〇年代末は、高校紛争の真ただ中でした。安保闘争が盛んな時期で、社会のあり方に対して疑問を持っていた若者たちは、社会変革に希望を持って闘争へ向かっています。 「人間とは」「社会とは」という議論が毎日のように友人たちの間で交わされていました。

そのような日々の中で、私自身、人間とは何なのかという疑問が次第に深まっていきました。人間という存在の本質的な部分がわからなければ、社会を変革することなどではしない、と思ったからです。

人間とは社会的動物です。人間の本質を知るには、人間社会の由来を知らなければならぬだろう。そう私は考えました。そのためどんな学問を学ぶとよいだろうと考えたとき、私が選択したのは人類学でした。人間の本性を知るには、人間社会がどのような形で生まれ、進化してきたのかを知る必要があると思ったからです。

人間社会や人間そのものを研究対象とする学問は、人類学以外にも、社会学、心理学、精神医学など数多くあります。

しかし人類学以外の学問は、往々にして現代社会の人間を題材としています。そもそも人間の本性というものは、太古の昔から作られてきた歴史的なもののはずです。

人間の本性を解き明かすには、人間の起源を辿らなければ根源的な事実には近づけないのではないか。どのように人間は社会的動物となり、どのような経路を辿って現代社会の原型が誕生したのか。現代にのみ視点を置いていたのでは、その根本をわかりきることはできません。

人間が人間になる以前、今とは違う動物だったころ、われわれの祖先はいかなる性質を備えていたのでしょうか。それを知ることができれば、人間の本性を理解する手立てになります。人類学は人間の根源を追究し、人間とは何かを研究する学問です。人間や人間性の起源を辿り、そこから現代の社会を解明しようとしているのです。

進化論と西洋社会

古代ギリシアの哲学者、アリストテレスは、身体面でも精神面でも人間と動物が連続的な特徴を持っていると考えていました。アリストテレスは「人間とほかの動物との大きな違いは、直立二足歩行と大きな脳だけである」と記しています。

しかし、このような観点はその後、神学の発展によって一度忘れ去られてしまいました。人間と動物の連続性を自然科学的な視点で探究することは、キリスト教的世界観ではタブーだったのです。生きとし生けるものはすべて全能の神が創造したものであるというキリスト教の思想は、中世以降、進化論が登場し受け入れられるまで、とても長い間、西洋社会での支配的な考え方となっていました。

一八五九年、イギリスの生物学者であったチャールズ・ダーウィンは『種の起源』を刊

行しました。これはキリスト教の教義に真っ向から異議を唱える内容だったので、当時の教会や知識人から猛烈な批判が起こりました。『種の起源』には、人間についての言及は実はほとんどありません。

しかし、ダーウインの進化論から必然的に導かれた「人間の祖先はサルの仲間である」という説は、瞬く間に人々の口に上るようになりました。人間の祖先はほかの類人猿と共通しているなんて当時は誰も考えていませんでしたから、「ダーウインはとんでもないやつだ」と散々批判されました。進化論は今や生物学的には疑いのような事実ですが、たった百六十年前には受け入れがたい非常識だったのです。

ダーウインは一八七一年に『人間の由来』を出版します。ここで改めて、人間もほかの生物と同じ法則に従って進化したことを主張しました。この中でダーウインは人間と類人猿の間には、体格、生理、情緒、社会性、心理といった面で類似した特徴があることを述べています。また、人間の祖先はアフリカで見つかる可能性が高いということも、すでに示唆していました。

日本で生まれた霊長類学

西洋で生まれた人類学は、はじめ人間の文化や社会のみを扱っていました。ダーウィンの進化論以後も、西洋の研究者たちはサルや類人猿の研究には抵抗を示しました。キリスト教的世界観では、「神の姿に似せて作られた」人間というものは、全生物の中でも特別な存在です。人間以外の動物に、自分たちの祖先の姿を重ね合わせたくはないというのが、彼らの心理には根深くあったのでしよう。

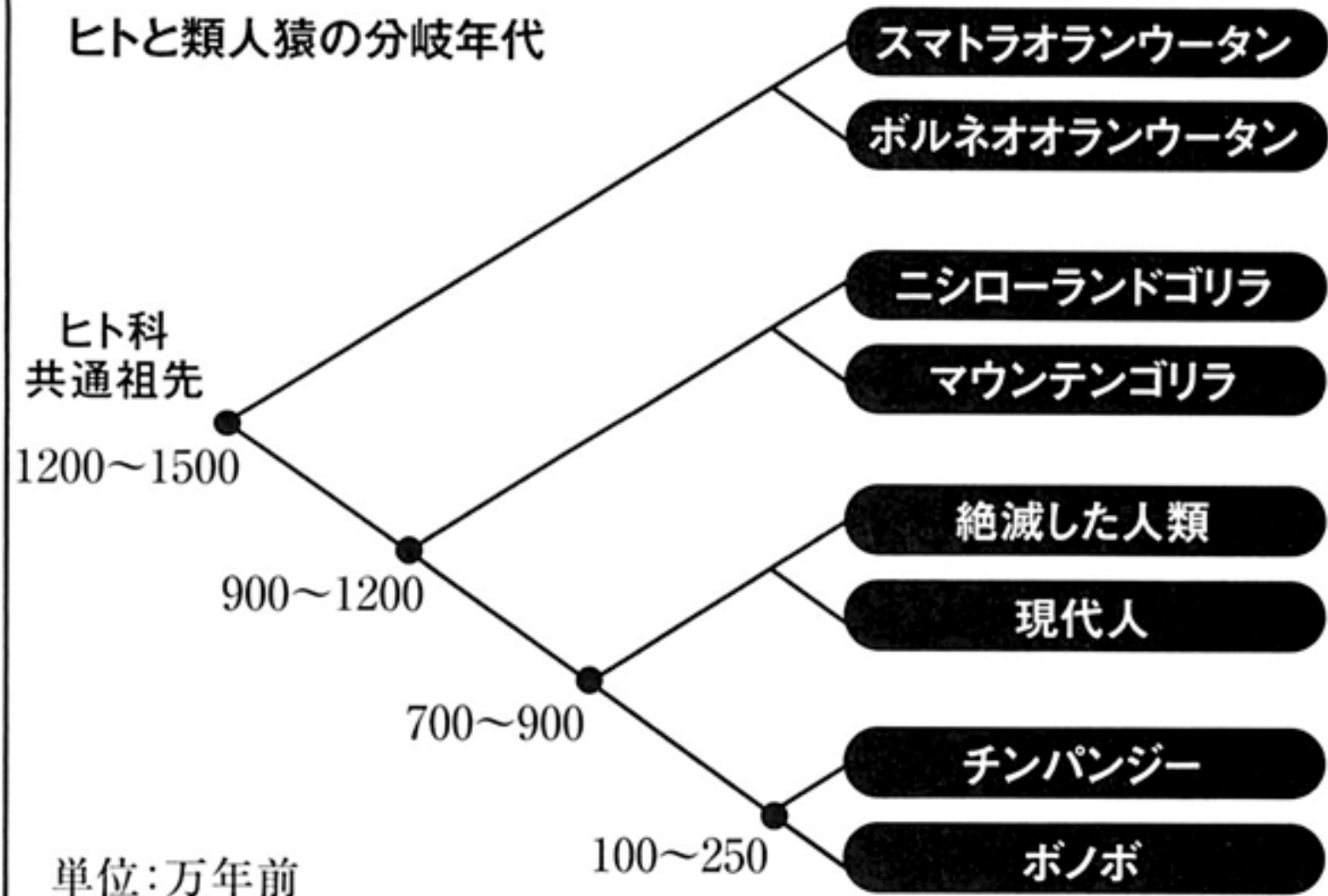
しかし、戦後の日本で、人類学に新たな視点をもたらす新しい学問が誕生します。それが霊長類学です。

霊長類学は、人間以外の霊長類を対象として人類の進化を考えようとするものです。人間とは何か、人間の本性は何に由来するのかを霊長類の研究を通して明らかにします。

霊長類とは、哺乳綱霊長目に属する動物の総称です。霊長類の中には、ヒトや類人猿、サル、そして原猿類が含まれます。霊長類の系統を追えば、原始哺乳類からヒトまでの進化の跡を辿ることができるのです。

遠い昔の人間がどのような生活を送っていたのか調べようとするとき、化石を掘り起こ

ヒトと類人猿の分岐年代



すことで得られる情報もあります。たとえば体の進化の過程などです。しかし、古代人の脳や心は化石には残りません。社会を形づくる人間同士の関係性も、化石や遺伝子情報には表れません。ですから、人間の祖先の暮らしの歴史を知るには、われわれ人類と共通の祖先を持つ近縁の種の行動を調査する必要があります。

尻尾がなくて、ヒトと近縁なものをヒト科と称します。ヒト科には、ヒト属のほかにはチンパンジー属、ゴリラ属、オランウータン属があります。

およそ千五百万〜千二百万年前にオランウータンが共通祖先から分かれ、次に

千二百万〜九百万年前ゴリラが分かれました。チンパンジーとの共通祖先と分かれてヒトが誕生したのは九百万〜七百万年前です。その後、二百五十万〜百万年前にヒガシゴリラとニシゴリラが、チンパンジーとボノボが分かれます。これが類人猿の辿ってきた道筋です。

人間は共通祖先から分かれて現代の人間になるまでにどんな特徴を残し、何を捨てていったのか。進化の過程で、人間はオランウータン社会やゴリラ社会の特徴を温存しながら種として分かれていったのかもしれない。

人間の社会の起源を知るには、ゴリラの社会、そしてチンパンジーなどほかの類人猿の社会を研究し、比較することが必要です。彼らの生活を調査し、比較することで人間の本性の歴史的な由来を類推することができ、生物学的に妥当な人間観や世界観を手に入れることができるからです。

霊長類学は京都大学の人類学者、今西錦司さんによって一九四八年に創始され、ニホンザルの研究からスタートしました。

動物と人間の上に絶対的な境界を設ける西洋的な考え方は、そもそも日本にはありません。「人間と類人猿は祖先を同じくする」という事実に対して、西洋の社会に見られるよ

うな抵抗感を日本人はもともと持たないのです。

日本には列島各地に野生のニホンザルが生息しており、昔から日本人にとってサルは身近な存在でした。サルは中南米、東南・南アジア、アフリカに分布しており、北米やヨーロッパには生息していません。いわゆる先進国と言われる国々の中で、人間以外の霊長類が生息するのは日本だけです。

「さるかに合戦」「桃太郎」など、日本の民話にはサルがよく登場します。このことから日本人は文化的にもサルを受け入れてきた民族であると言えるでしょう。

人類学研究の根幹となる霊長類学研究が日本で生まれ、世界をリードすることとなった背景には、こういった地理的・文化的幸運がありました。

今西錦司の思想

一九四八年十二月三日、当時、京都大学で講師を務めていた今西さんは、伊谷純一郎、川村俊蔵というふたりの学部生を連れて宮崎県の幸島^{こうしま}へ調査に入りました。初めは半野生のウマの研究を目的にしましたが、偶然ニホンザルの群れと遭遇し、こちらのほうが面白いテーマだと直感したそうで、この日から野生ニホンザルの調査が始まりました。

今西さんは人類学者であり、登山家・探検家としても知られます。登山家としては当時まだ誰も足を踏み入れていなかった大興安嶺だいこうあんれいや、カラコルム、ポナペ島などで積極的に学術探検を進める一方、日本の霊長類学いしずえの礎も築きました。山登りと学問を両立させながら二つの世界で先陣を切り、隊長として後進を導きました。

今西さんは一九四一年に『生物の世界』という書物を著しています。「生物の進化とは歴史であり、種は環境とのかかわりによって生成、発展していくものだ」という生物哲学の思想が著されています。「人間とは特別な存在ではなく、生物の中のひとつの種にすぎない。人間社会は他の生物と同じように種社会として捉えることができ、動物と人間の間には社会的な連続性がある」という主張がなされています。人間だけを特別な存在として扱う西洋的なものの見方とはまさに真逆の発想です。

「社会」というものは人間にしかないと考えるのが、当時の世界の常識でした。しかし、今西さんは「人間以外の動物にも社会が認められる」ことを主張していました。今西さんが標榜したのは「人間の社会の進化的起源を、サルの社会の研究から探る」という研究テーマでした。人間は初めから人間固有の文化や社会を持っていたわけではない。進化の過程でそれを手に入れはずだ。そうであれば、人間の文化や社会の原型と言うべきものは、

動物の社会にも見られるはずだ、と今西さんは考えたわけです。

こういった発想は当時の西洋の学者の中には皆無でした。というのも、欧米の学者たちは、動物の生態に着目するばかりで、その社会には興味を持っていなかったからです。

すべての生物に社会を認め、そのひとつとして霊長類や人間の社会を位置づけようとした今西さんの発想を根幹として、日本の霊長類学は動物の社会の研究、つまり動物社会学から始まりました。これは非常にユニークなことです。今西さんの霊長類学は初めから、人間以外の動物と人間の社会の間にある、進化上のつながりを見出すことを目標にしていたのです。

人間以外の動物にも社会があることを、今西さんはフィールドワークによって明らかにしようとしていました。その最初の証拠は幸島で見つかります。それが有名な「イモ洗いをするサル」です。

幸島のサルのイモ洗いは、一九五三年に一頭の子ザルがサツマイモの土を落とすために小川で洗ったのが始まりと言われています。イモ洗いはそれまでサルが示したことのない新しい行動でした。

これが次第にほかのサルにも伝わり、同じ行動が見られるようになりました。ひとつの

新しい行動がほかの個体に伝播し継続していく過程は、文化の伝播の仕方と酷似していた。遺伝によらずに新しい行動が仲間に伝わっていくこの過程は、文化と社会の存在を予感させるものだと言西さんは宣言しました。

この発表は、非常にセンセーショナルなものとして世界に受け止められました。「人間に社会や文化があるのは、知性と言葉があるからだ」という考え方が主流だったために、言葉を持たないサルにも社会や文化があるという主張は、簡単には理解されなかったのです。

人間だけにあるとみなされていた文化や社会の規則がサルにも見出せることを、日本の霊長類学者たちは繰り返し主張しました。それが世界的に認められるまでには何年もの歳月がかかりましたが、現在では当たり前前の事実として周知されています。また、霊長類学は最初から人類学の一分野として認められていたわけではありませんでした。今西さんの功績が認められるにつれ、現在の地位が確立されていきました。

「ジャパニーズ・メソッド」の確立

霊長類学における今西さんの功績のひとつに、「ジャパニーズ・メソッド」と呼ばれる

観察方法を確立したことがあげられます。ジャパニーズ・メソッドとは、ニホンザルの一頭一頭に名前をつけて観察する、というものです。

この方法も当初は世界の学会から大顰蹙ひんしゅくを買ったものです。世界中のどんな学者もゾウはゾウ、トラはトラと、ひとつの類でしか見ていなかったからです。

なんといっても人間こそが全生物の頂点にいて、そのほかの動物は人間よりも下位にある、といった考え方が特に西洋においてはあまりにも強固な常識だったために、動物に名前をつけるなんてペットや家畜など人間の身近な動物以外考えられないことだったわけです。

今西さんのもとで学んでいた伊谷さんは、一九五四年に個体に名前をつけた研究結果をまとめて『高崎山のサル』という著書を発表しました。動物に名前をつけるのは擬人的な行為であり、動物を人間と同じように見る誤った見方である、と西洋社会は受け止め、大きく反発しました。

それに対して今西さんらは「名前をつけないことには動物の社会的な行為は分析できない。確かにこの方法には擬人的な考えや見方はどうしても潜んでしまう。だからこそ、それを長期の研究によって正しく修正していく態度が必要だ」と主張し、何年も連続して二

ホンザルの研究を行いました。

その結果、この方法で観察を行うと、サルの社会構造がはっきりと見えることが証明されました。当初はこの方法に異を唱えていた学者たちも、後年には今西さんの説の正しさを認めました。動物に名前をつけるジャパニーズ・メソッドという個体識別法は今では世界標準となっています。現在はどんな研究者も、研究対象に名前をつけて観察しています。ジャパニーズ・メソッドは、実は『シートン動物記』をヒントにしています。『シートン動物記』は西洋では科学ではなく動物文学として、十九世紀の終わりに流行しました。『シートン動物記』には、「オオカミ王ロボ」「暴れ猿ジニー」など、動物に名前がついているのです。

今西さんはこれにならって、われわれも名前をつけようではないか、と考えたのです。「ただし、シートンは英雄にだけ名前をつけたが、われわれはすべての個体に名前をつけて、一頭一頭を調べよう。われわれがサルに成り代わってサルの歴史を記録することが、サルの社会を調べることにつながるのだ」と。

今西さんが率いた霊長類学は、こうして独自の歩みを進めながら、世界をリードする学問に成長していきました。

「サル化」する人間社会
山極寿一・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,100 円（本体）＋税
ISBN978-4-7976-7276-3

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)